

者は結合の概念であり、それによって客体そのものの概念でもある。しかし前者はすでに与えられた諸概念の比較の概念に過ぎず、それだから全く異なる本性と使用とを持つ。(IV326)

イマヌエル・カントは「形式主義 Formalismus」の哲学者として、広く知られている。批判期のカントの思考を貫くこの根本性格をポジティブに受け取るのか、それとも G. W. F. ヘーゲルや M. シューラーのようにネガティブに受け取るのかは、勿論、一つの重要な問題である。だが、本発表ではもうひと段階さかのぼった問題を扱いたい。それはカントと「質料形相論 Hylomorphism」をめぐる問題である(以下本邦での慣例に従い、カントの用いる Form は「形式」、Materie は「実質」という訳語をあてて表記する)。

「形式主義」は単純に言えば、〈形式が実質に先行する〉または〈実質に対して形式を重視する〉、そうした立場を指す。さて言うまでもないことではあるが、〈形式と実質のどちらが先行するか〉と問いを立て、上のように結論付け一連の思考は、哲学的な伝統で言えば「質料形相論」と呼ばれる土俵上で展開されている。では、なぜカントは「批判」というプロジェクトを〈形式-実質〉という枠組みに依拠して遂行し、また両者の先後関係を問いただしてゆくという仕方でも議論を組み立てたのか。これらの問いに対して、『純粹理性批判』や『イェシェの論理学』の議論を参照し、一つのあり得る回答を提示することが本発表の目標である。なお、この疑問は発表者独自のものでなく、すでに文献で指摘されている。それらを概観するに、我々の感性的直観を扱う『純粹理性批判』「感性論」に質料形相論が導入される(／導入されてよい)理由が、とりわけ解釈者を困惑させている(cf. Falkenstein, *Kant's Intuitionism*, Smyth, *Intuition in Kant*)。そのため本発表では「感性論」に焦点を当てて、上の問いを検討してゆく。

以下では上のように問う背景を簡単に説明しておきたい。

そもそも「質料形相論」とはアリストテレスが実体の生成変化を説明するべく導入したもので、〈実体は質料と形相から成る〉という、事物の説明原理である。したがって「質料形相論」は実体という概念と密接に関係するものである。周知の通り、アリストテレス以降、多くの哲学者が「質料形相論」を用いて多種多様な事物を分析し、さらに両者の先後関係を問うてきた(cf. Charles 編 *The History of Hylomorphism*, pp. 10-38)。これはカントも同様であり、その点でカントが「質料形相論」に依拠して自身の思索を展開したことは、哲学的伝統に倣ったものと説明することも可能だろう。実際、カントを輩出したケーニヒスベルク大学はアリストテレス主義の牙城であったし、カントに先んじて、質料形相論を認識論の文脈の中で使用する論者もそこにいた(cf. Sgarbi, *Kant and Aristotle*, pp. 82f.)。これらの伝統がカントの思索を規定して、カントが何の疑いもなく「質料形相論」に従って思索を展開したと考えるのは、一見無理筋なことではない。

だが実際そうは考えにくい。第一に、カントは批判期において「実質と形式」の概念を「純粹悟性概念」から区別して「反省概念 Reflexionsbegriff」という独自の地位に置いているからである(A262/B318)。しかもその際には、「実質と形式」を含む諸「反省概念」の概念の従来の使用法を批判・訂正する意図さえもあった。

以上のカントの指摘を真剣に受け止めれば、カントが「実質と形式」を批判期も使用し続けたことが無自覚に伝統に従ったものだと考え難く、むしろ訂正後の(反省概念としての)「実質と形式」に、何らかの意義を見出していることだと考えるのが妥当であろう。

第二に(これは多くの解釈者が指摘していることだが)、我々の意識から独立に存在するような実体の認識不可能性を主張していたカントが、自説に対する誤読に繋がりがかねない危険をおかしてまで、実体論とのつながりを想起させる「質料形相論」になお拘る理由はないように思われるからだ。それならば、「実質と形式」と似たような概念、例えば「アポステリオリなもの」と「アプリオリなもの」という区分だけでもって議論を構成した方が余計な誤読や読者の困惑を避けられたはずだ。しかし、それでもなおカントは質料形相論を自身の思索の根幹に置き続けた。ならばそこには何らかの理由があったはずである。以上が、先述のように問いを立てた背景である。

本発表においては、まずは議論の土台として、「実質と形式」が分類されるころの「反省概念」の内実と地位を『純粹理性批判』、『プロレゴメナ』、『イェシェの論理学』を基に整理する。またこの整理を踏まえて、我々が何かを思考する中で、それが「実質と形式」という区分を持つものとして考えられるのはどのようにしてなのかを理解する。私の解釈では、カントにあって、この二つの側面は対象の側に帰属するものでなく、「実質と形式」の対概念を我々が適用することで対象において見出される、主観的な区別である。言うなれば、何か「実質」と「形式」とから成る対象がすでに存在して、そこから我々がこの区別を認識することで学び取るのではない。では、このような「純粹悟性概念」とは異なる、『プロレゴメナ』では「与えられた諸概念の比較の概念に過ぎない」とも言われる「反省概念」としての「実質と形式」が、なぜカントの時空間論の根底に置かれるのか。カントはこれのいかなる点に、他の類似する対概念では持ち得ないようなこれ固有の意義を見出していたのか。これらの問題に本発表では迫ってみたい。

参考文献

- Charles, David (Ed.), 2023. *The History of Hylomorphism: From Aristotle to Descartes*, Oxford: Oxford University Press.
- Lorne, Falkenstein, Falkenstein, 1995. *Kant's Intuitionism: A Commentary on the Transcendental Aesthetic*. Toronto: University of Toronto Press.
- Sgarbi, Marco, 2016. *Kant and Aristotle: Epistemology, Logic, and Method*, Albany, New York: State University of New York Press.
- Smyth, Daniel, 2024. *Kant in Intuition: The Boundlessness of Sense*, New York: Cambridge University Press.

私は反省概念の名の下で、カテゴリーの手引きに従い、一つの表にもたらした概念が、許可も正当な要求もなく、存在論において純粹悟性概念の内に混入しているが、後